

坂口安吾

奥野健男

坂口安吾

奥野健男



文藝春秋

著者略歴

大正15年(1926)、東京に生まる。東京工業大学化学科卒。専攻、高分子化学。文芸評論家。多摩美術大学教授。

著書『太宰治論』『現代作家論』『文学的制覇』『現代文学の基軸』『現代文学の風土』『日本文学史』『文学における原風景』

坂口安吾

定価二三〇〇円

昭和四七年九月一五日 第一刷
昭和五〇年八月二〇日 第三刷

著者 奥野健男

発行者 榎原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一一二一一
振替口座東京七七八七四三番

本文印刷 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

製函所 加藤製函

© 1972 Takeo Okuno

落丁乱丁本はお取替致します

目次

I 安吾発見

「墮落論」の衝撃

虚無的合理主義——安吾の宇宙

II 作家以前

生家と父

母への憎しみ

原風景

自己聖化への努力

暗鬱な青春——長島萃との交友

III 生涯と作品

第一章 新進作家時代

華々しき登場

自ら不遇に

「木枯の酒倉から」から「母を殺した少年」まで

九

二

三

元

四

四

五

六

六

七

七

七

八

八

第二章 「吹雪物語」と放浪時代——戦争期

一一三

矢田津世子について

一一三

「吹雪物語」

一一四

「閑山」から「朴水の婚礼」まで

一一五

第三章 戦後乱世の時代

一五三

敗戦と安吾——「墮落論」

一五三

「白痴」から「恋をしに行く」まで

一五五

歴史小説

一六二

自叙伝小説——「暗い青春」

一六五

第四章 流行作家時代

一七六

「桜の森の満開の下」と「花妖」

一七六

「花火」から「青鬼の禪を洗う女」まで

一八五

「不連続殺人事件」と推理小説

一九二

第五章 無頼——狂気——嵐の季節

二〇七

無頼派として——エッセイを中心に

二〇七

鬱病——狂気の克服

二四

「決闘」から「カストリ社事件」まで

三〇

長篇「火」

三六

「精神病覚え書」から「肝臓先生」まで

三九

第六章 巷談師への変貌——風の季節

三三

税金闘争、競輪闘争

三三

巷談師安吾

三八

座談師安吾

四七

「街はふるさと」

四五

「水鳥亭由来」から「膝が走る」まで

六〇

第七章 歴史家、文明評論家として

六五

「安吾新日本地理」

六五

「安吾史譚」

七〇

「安吾捕物帖」

七三

「飛驒の顔」「夜長姫と耳男」から「中庸」まで

八三

歴史小説

八九

エッセイ

二九五

第八章 晩年

二九〇

死生観

二九〇

「幽霊」から「桂馬の幻想」まで

三〇三

「真書太閤記」「狂人遺書」から

「安吾新日本風土記」まで

三二四

IV 安吾復活

三二五

年譜

三五三

あとがき

装幀 山本美智代
年譜 関井光男

坂口安吾

I
安吾發見

「墮落論」の衝撃

昭和二十一年（一九四六年）『新潮』四月号に載った坂口安吾の「墮落論」を読んだとき受けたような鮮烈な衝撃を、ぼくは生涯において二度と読書から受けることはないであろう。それは十九歳のぼくを今まで縛っていた戦争期の倫理や観念やタブーから一挙に自由にしてくれ、新しい生き方を示してくれた霹靂であった。政治的な意味での終戦宣言は八月十五日の天皇の詔勅であろうが、ぼくにとって魂の終戦宣言は坂口安吾の「墮落論」にほかならなかった。「墮落論」によって、主体的な人生としての、ぼくの戦後がはじまったのである。

（半年のうちに世相は変わった。醜の御楯といでたつ我は。大君のへにこそ死なめかえりみはせじ。若者達は花と散ったが、同じ彼らが生き残って闇屋となる。ももとせの命ねがわじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて。けなげな心情で男を送った女達も半年の月日のうちに夫君の位牌にぬかずくことも事務的になるばかりであろうし、やがて新たな面影を胸に宿すのも遠い日のことではない。人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ。）

戦争中おごそかに歌われた短歌の一部を巧みに挿み、その七五調の詠嘆を逆用し、たたみ込むよう

な調子の尻をまくった書出しが、まずぼくをとらえた。何を言おうとしているのかと思わず目を見はったぼくに向って、次から次へと坂口安吾の言葉はシャワーのように襲いかかって来て、小気味よいぐらい、ぼくの心をいちいちえぐって行くのだ。

（人間。戦争がどんなすさまじい破壊と運命をもって向うにしても人間自体をどう為しうるものでもない。戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませていてではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。

戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだろう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄の如くではあり得ない。人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはいられず、武士道をあみださずにはいられず、天皇を担ぎださずにはいられなくなるであろう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦墮ちることが必要であろう。墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならぬ。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。）

「墮落論」はこの有名な「生きよ、墮ちよ」という叫びで結ばれている。今日はじめて読む人々は、しごく真つ当なこと、当り前のことを、力んで述べているだけであり、なぜこのエッセイが人々に大きな衝撃を与えたのか、なぜあんなに騒がれたのか、不思議に思うかも知れない。まさに真つ当なこ

とを、真っ当に語っているに過ぎない。しかし戦後のこの時期、日本人は誰ひとりとしてこの真っ当なことに気づかず、このようなあたりまえの主張をなし得なかった。ただ坂口安吾のみが、墮落せよ、人間は墮れるところまで墮れろと、真正面から言い切ったのだ。それはまさに革命的な言葉であった。敗戦の虚脱と昏迷の中にいた人々は、こういう考え方、生き方もあったのかと、目からうつぶりがとれた解放感を味わったのだ。

その頃のぼくたちは、自分がいったどこにしているのか、どうなっているのか、どうすればよいのか、全くわからない状況の中で、その日暮しに生きていた。敗戦を口惜しく思う一方、死なずにすんだことをよるこぶ。多くの仲間たちがそのため生命を捧げた戦争が、そして日本が、全く価値のない存在であるとされ、恥しさにさいなまれながらも、一方指導者たちの一億総懺悔だ、文化国家建設だ、デモクラシイだ、平和革命だ、天皇制打倒だ云々の掛け声には、ただ白々しさしか感じることができなかった。状況は大きく変り、観念的には戦争や軍国主義を否定しながらも、ぼくたちの倫理感、情緒、精神構造はまだ戦争中のままであったのだ。

ぼくたちは食うために取締まりの網をくぐって買出しをし、闇商売のアルバイトもやっていた。生きるためには人を押しつけてエゴイスティックに行動せねばならなかった。しかしなにかいけないことをしているという、うしろめたさがあった。戦争中抑圧されていた性本能につきあげられパンパンまがいの女体を求め、進駐軍から流れてくるあやしげな本や写真に興味を燃やした。しかしこれははずべきことだと考え、はげしい自己嫌悪に陥っていた。自分のやっていることに自信がなく、本然の姿でないという罪意識がつきまとして離れなかった。戦死した友人に対し、特攻隊に対し、顔向けできない気持であった。つまり戦争中、純粹だったおれも墮落したものだという意識にさいなまれてい

そういう時、坂口安吾の「墮落論」が発表された。人間は墮落する。「戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ」その言葉がどんなにぼくたちに大きな救いを、デスベリートな解放感を与えてくれたか。それは今日では想像もつかないであろう。「時にかないし言葉は金である」というが、当時の日本の青年にとって、このくらい、時に適った切実な言葉はなかった。歴史を訪ねても、このように時代とびったりと重なりあった発言は少ないであろう。まさに時代の発言であり、予言者、教祖の言葉であった。ぼくたちはこの言葉によって始めて闇屋として生きている自分に、性をもとめている自分に自信を持つことができた。

しかも「墮ちる道を、墮ちきる」と積極的に墮落を説いているのだ。倫理感のコペルニクスの転回とも言える革命的な言葉であった。その上、「墮ちきること」によって、自分自身を発見し、救わなければならぬ」という発言は、自己形成期にいる青年のまじめな求道的な倫理感にも合致した。それは墮落——止揚——真実の発見という弁証法として、当時の青年に受けとられた。

しかし「墮落論」の当時の青年に与えた驚くべき、広く深い影響力の原因は、単に「生きよ、墮ちよ」という大胆な主張だけではないように思える。この主張だけなら、どんな時代の青年にも、当然の言葉として受容され、理解されるだけだ。「墮落論」が、それこそ特別の言葉として、ぼくたちの魂をうつのは、彼が戦争中の日本の状況、日本人の行動を、実に見事に描き、評価しているためにはかならない。特攻隊、烈婦のけなげさ、焼け出された庶民の無心さ——上品な父と娘がひとつの赤皮のトランクをはさんで濠端の緑草の上に坐っている、まるで平和なピクニックのような姿、十五、六歳の少女たちの生命に充実した無心の笑い顔、泥棒もオイハギもない空襲下の日本、焼跡の青空、そ